

# 幼稚園の歴史を探る

～Feel history of kindergarten～

矢野 日出子

## はじめに

“幼稚園は一体、何時？誰によって？どこで？始められたのか”。この問いに対して私は“1840年6月28日、ドイツのチューリンゲン州のバードブランケンブルグで、フレーベルという教育学者が……”と答えられる程度のお粗末な知識しかもっていない。

私が幼稚園の教師として幼児と一緒に過ごせたのもこの“フレーベル”が幼稚園を始めてくれたからである。幼児から多くのことを学ぶことができたのも然り、である。それなのに彼に対するあるいは幼稚園の発祥に関しての知識は皆無に等しい。おそらくフレーベルを研究することは、幼稚園教育の根源的なあり方やなぜ幼児にとって幼稚園が必要なのか、などを教えてくれるであろう。私は現場人の立場でフレーベルという人を知りたいと思った。そこで以前から興味もあり、それでいて資料のなかなか見つからなかった「FRÖBEL MUSEUM」を目指しドイツに向かった。ドイツのチューリンゲン州とはフランクフルトから電車で2時間半程度の所だということだがどんな所なのだろうか？“幼稚園の始まったところはどんな所なのだろう”と興味を抱き、世界中からフレーベル学者が訪れるというフレーベル博物館を訪ねてみるようになった。以下にこのMUSEUMをきっかけとして幼児教育家フレーベルの足跡をたどってみることにする。

## 第1章 フレーベル博物館と幼稚園の誕生

ベルリンからエアフルト駅乗り換えでバードブランケンブルグ駅に降りる。周辺は大きな建物も何もない静かで清潔な町である。町中には「フレーベル美術館」を示す立て札があちこちらにあったり、道を聞いても「Oh! Frobel!」と親切に教えてくれたりと、フレーベルを大変誇りに思っていることが伝わってくる。昼間だというのに人通りも少なく、静かなラベンダー

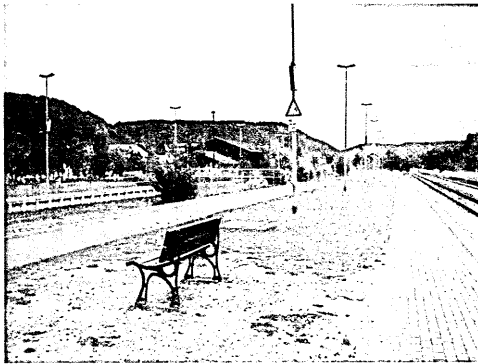
が咲き乱れる町であるようだ。

従来は「国立ハイデルブルグ博物館分館」として運営されており、現在の建物は2010年に改築された外壁はピンク色のかわいらしい雰囲気建物である。私は以前から、この MUSEUM には世界中からフレーベル学者が研究のために訪れる、と聞いていた。やっと訪れることのできた博物館であり幼稚園はこの地から始まったのかと胸が躍った。

展示品の内容は、日本でいわゆる「恩物」と呼ばれている幼児用の玩具であったり、彼の直筆の手紙であったり書斎であったりとフレーベルを知るには十分のものである。「恩物」と訳されているのは日本での訳語であり、MUSEUM のパンフレットには“gift for playing”直訳すれば「遊びのための贈り物」フレーベルは、全くの創造による材料を通してのみ精神が自己表現できると考え専らこの遊具の製作に没頭した。そしてこの自ら考案し製作した遊具を“Gaben”と名付け、彼の周りの親しい人々やブランケンブルグの町民までも総動員して製作販売し、徐々にフレーベルの教育思想も普及されていった。

ところがやっと仕事が軌道にのったかと思われる時に、愛するウィルヘルムミネ夫人が病気のため亡くなってしまった。

彼女の死後落胆するフレーベルであったが、同僚たちに励まされ1839年～1844年の間、この地に「幼児教育指導者講習科」を設立し、(ここはその後、「幼児期と青少年期の作業活動を育

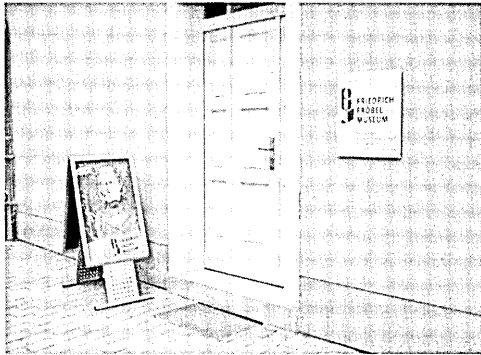


<バードブランケンブルの駅ホーム>



<町中に立つ《フレーベルミュージアム》の看板>

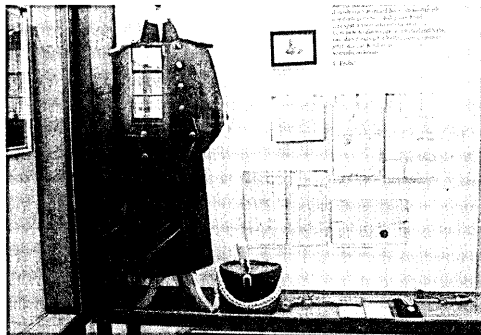




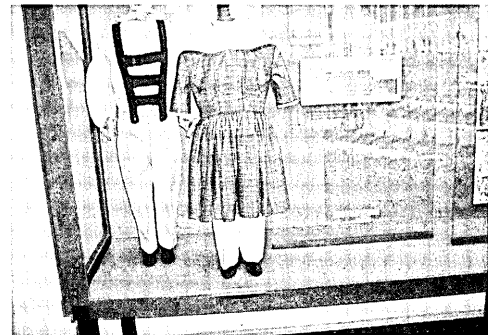
<フレーベル MUSEUM の玄関>



<フレーベルの胸像>



<フレーベルの着ていた服>



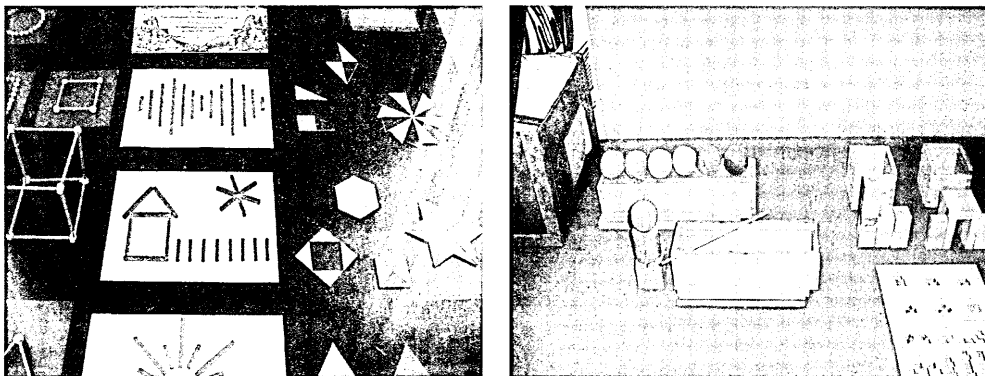
<世界最古の幼稚園の制服>

むための施設」と改称された) 遊具や教具の販売やPR活動を行う拠点となった。またここで、フレーベルは『日曜紙』という新聞を発行し数々の論文を発表、幼児期の教育の大切さを訴え続けている。彼の『日曜紙』に発表した論文の趣旨は以下のようなものである。

「子どもの最も早期の活動、子どもの最初の行動、人間や子どもの中に早くから表れる形成衝動や自由な活動および自己活動の衝動を理解し、家庭における子どもの最も早期の作業や、また、自己創造や自己観察や自己吟味によって自分自身を教育したり、教授したりする衝動をしっかりと捉え、これを大事に育むべきである。」

フレーベルは今から約170年前に幼児を人間の基礎、と捉え何らかの教育が必要と述べているのではないだろうか？人間の本来の姿を捉えようとしたフレーベルの鋭い眼は驚きである。彼の幼児を人間の基礎、と捉えた考え方は我が国の平成18年12月22日に公布された「教育基本法」の第2章「教育の実施に関する基本」に（幼児期の教育）として

第11条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。



<有名なフレーベルの恩物>

以上のように幼児期の教育の大切さが「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と初めて明文化された。フレーベルは170数年前からすでにこのことを重要視した教育観を抱いていた。

そして“gift for playing” 神様からの贈り物を用いて作業をしたり、幼児本来の遊びの要求に忠実に従って教育してこそ体や手足、感覚器官を強くし心情の発展や精神の統治があるとしている。私はフレーベルが幼児期の「遊び」の大切さに気付いていたことにも素晴らしさを感じる。幼児期本来の「遊び」こそ彼らにとっての学びであると考えからだ。

なぜなら、今こそ「幼児期の遊び」が問題になっているからである。せっかくフレーベルが強調している遊びであるが、今、幼稚園においては「遊べない子ども」が増えている現実があるからである。彼は「人間や子どもの中に早くから表れる形成衝動や自由な活動および自己活動の衝動を理解し」と述べているが、「形成衝動、自己活動の衝動……」が起こらない幼児も増えてきているのではないだろうか？そのために現場の保育者はいろいろな指導の手立てを講じてその子どもの内面を揺さぶり衝動を起こそうと苦心する。つまり自発的・自主的に遊ばそうと願う。フレーベルはこの“Gaben”を用いて「形成衝動、自己活動の衝動……」を起こそうとした。幼児本来の全く創造的な遊びを引き出そうとしたのではないだろうか。170年経った今でも十分に共感できる教育の思想であることは驚きである。

また、このブランケンブルグで始められた「幼児教育指導者講習科」には、初めは幼児教育に熱心な数名の男性教員のみ参加であったが、徐々に女性も増えてきた。そしてこれらの講習生の実習のために、この地で6歳以下の幼児約40名を募集して実習を行った。フレーベルはこれを「遊びと作業の教習所」と名付け、これがいわゆる“幼稚園”の前身とされているものである。こうしてこの静かな小さな町から幼稚園が始まった。私は、フレーベルが理論だけでなく、受講生に実習をすることにより幼児への理解を深めさせようと試みたことも大変優れている、と考える。幼児教育は理論だけではなく実践を通して理解する必要があると考えるからである。事実、大学での実習を通して学生が講義や書物からだけでなく様々なことを学んで

帰ってくるからである。多くの学生が「教科書で習ったことが具体的によりよく理解できる」との感想を述べている。

## 第II章 教育学者フレーベル

ここでは、偉大な教育学者であり、幼児教育の父として知られているフリードリッヒ・フレーベルは、どのような人物であったのかを探ってみることにする。

### 第1節 フレーベルの生い立ち

#### (1) 誕生～幼年期

1782年4月21日に南ドイツのチューリンゲン州のオーバーワイスヴッハという村に、家族の祝福を受け5男として生まれた。父親は旧ルター派教会の牧師であり、厳格で学識の高い人であったと伝えられている。一家は幸せに暮らしていたが、彼の誕生後9ヶ月で母が病死するという悲しい運命に見舞われる。そしてフレーベルが4歳になった時、新しい母親を迎えられ、この母親に男児が生まれた頃から寂しい思いをするようになる。このような幼児期の孤独な体験が、彼を内向的で思案や瞑想にふける少年に育てたのではないかと伝えられている。また、フレーベルは、幼児期をチューリンゲンの森を友として過ごし、大自然の中で思う存分遊ぶで過ごした。この体験こそが、後の彼の自然を愛し、自然に魅せられ、自然への探求心を培い生命合一の思想を生み出すに至ったと考えられる。フレーベルの幼児期から少年時代にかけては、温かな家庭の雰囲気や母親の愛に飢えており、そのためか自然界の中で思う存分遊ぶことで孤独な寂しさを癒したようである。「自由はドイツの森より」と謳われているチューリンゲンの森はフレーベル思想の土壌となっている。

ちなみに我が国の幼稚園教育の指針を示す『幼稚園教育要領』〈平成20年告示〉には“健康・人間関係・環境・言葉・表現”の5つの領域にわたり、ねらいや保育の内容が示されているが、その中には頻繁に《自然》という言葉が使われている。例えば“健康”の領域では、内容（各領域のねらいを達成するために指導する事項）の(3)には **進んで戸外で遊ぶ** ことが示されている。この事項は、先ほど述べたように本来、幼児は戸外で体を動かして遊ぶことが好きなはずなのに、走ったりとんだり跳ねたり転んだり……というような体を使って遊ぶことが苦手な幼児が増えてきている現実がある。そこでこの(3)の内容がわざわざあげられているのではないだろうか？

他にも“環境”の領域では、ねらい（環境の領域のねらい）(1)には

**身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ** と示されている。このことも都市化された生活のなかで育つ幼児の経験の偏りや、生命の大切さを学ぶことなどの機会が減少していることへの危惧からではないだろうか。

フレーベルの時代には、手探りであったであろう幼児教育だがチューリンゲンの森で彼が学

んだことを私たちに伝えてくれていると感じる。

## (2) 少年期

1792年、フレーベルが10歳になった時、シュタットイルムで牧師をしていた母方の伯父、ホフマンに引き取られ当地の男子校に転入する。この時に学校の宗教の授業で聞いた、イエスの生涯と働きについて彼は深く心を奪われた。以後4年間にわたり伯父のもとで幸せに満ちた日々を過ごす。その後、15歳からはザール河畔にあるヒルシェンベルグの林務官ヴィッツに弟子入りをしたが、ここでの2年間は、林務官としての仕事は教えてもらえず、もっぱら野山を歩きまわって植物を採集したり独学で数学や語学、植物学を学ぶことに没頭した。この間のチューリンゲンの森での生活は、幼児期の遊びの経験とはまた異なった自然の偉大さを感じさせ、フレーベルを自然科学の研究に向かわせるきっかけとなったと思われる。

## (3) 青年時代とイエナ大学

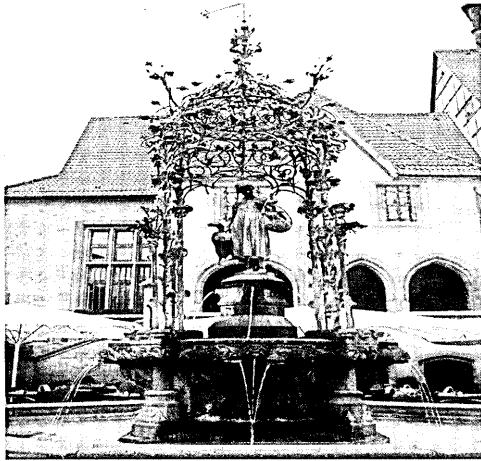
フレーベルはその後、林務官見習い期間を経て亡き母の僅かの遺産を学資として1799年10月、イエナ大学に入学する。大学では自然科学学会に入り、生命法則の研究へと歩みだしたかのようには思えたが、2年目の大学生活は経済的な困窮のため悲惨なものになってしまった。学費も払えず借金も返済できず、その結果、大学の監禁室に9週間も拘置されてしまう。しかしながら監禁の身であってもラテン語や幾何学、芸術の勉強を懸命にしていたということである。こうして1801年ようやく監禁が解かれイエナ大学を去り父のもとへと帰っていく。この時もフレーベルは父の書庫から、科学、美術、ドイツ古典文学等々を勉強した。しかし翌、1802年、フレーベル20歳の時に父親が他界し、またもや家を離れることになり、以後土地測量士や農場書記などの職業を遍歴することになった。しかしどの仕事も彼の気持ちを満足させるものではなかった。

この頃、イエナ大学時代に知り合っていた青年と再開したことから、フレーベルは彼の後の教育思想に大きな影響を与えたペエルシュケ、ノバーリス、アルントの哲学にふれることになる。

また、フランクフルトで出会った友人を介して23歳の時には当時ヨーロッパ中で名声の高かったペスタロッチに教を乞うため、スイスを訪れた。当初の予定では2週間程度の滞在予定であったが、これでは足りず1808年には再度ペスタロッチを訪ね、郷里でペスタロッチ教育法の普及を目指すこととなる。

1811年、ペスタロッチの学園から帰国したのちゲッティンゲン大学に入学し、言語学や自然科学の研究の道を志す。

ゲッティンゲンは古くから大学町として知られ、グリム兄弟が教鞭を執っていた大学もある。翌年、ベルリン大学（現 フンボルト大学）に移りドイツ・ロマン主義の気風の中で研究に



<ゲッティンゲン市庁舎前にある《ガチョウ姫リーゼル》の像>



<ゲッティンゲン駅>



<現在のゲッティンゲン駅前の自転車置き場>

没頭する。フレーベルはここでの自由な雰囲気の中にあり充実した生活を送り「球体法則」を結実させるとともに、これを人間教育にも取り入れることを試みていた。この「球体法則」の理論から創造された玩具が“Gaben”の一部にもみられる。また1813年には、ドイツではナポレオン軍に対する祖国解放戦争が始まっており、フレーベルもライプティヒで、この戦争にリュッツオー義勇軍として参加する。祖国を思う気持ちは人一倍強かったと思われる。

#### (4) 一般ドイツ学園の創設

彼にとって行軍や軍事教練の体験は、精神と肉体との相互関連を学ぶ機会でもあり国民教育思想の背景を形づくり、ドイツ国民としての意識を高めさせたとも言える。翌1814年5月のパリ講和条約が結ばれるまでの1年半の間、軍隊生活を送った。その後、戦争で他界した最愛の長兄の遺児3人と次兄の2人の息子の養育を引き受け、この5人を生徒にグリースハイムに「一般ドイツ学園」を創設する。フレーベル34歳、1816年10月のことである。ところが義姉の事情でこの土地を失うことになり翌年には近隣のカイルハウに移転しなければならなくなった。また、1818年の秋には、ベルリン時代に知り合ったヘンリエッチ・ウィルヘルミネと結婚、二人はフレーベル教育集団の協力者として苦楽を共にすることとなる。

開校当初、甥たち5人の生徒だけだった一般ドイツ学園であるが1825年には56名の生徒が在

籍するようになった。教育内容も歴史や文学，自然科学，フランス語，音楽等々徐々に充実していった。カイルハウでの生活は，早朝の礼拝に始まり山に登り森林を駆け巡り，大地を耕し大自然を友とする生活であった。生徒たちの回想では，労働の作業も大好きで森での木片集めやきのご採り，芋ほり，木の実摘みや野菜や穀物の収穫などフレーベルによるとこのような生活を「生活や経験に基づく教育」とも記している。謂わば教育実践の場であると同時に僅かの報酬も得，いわゆる自給自足の生活が行われていたといえることができる。またフレーベルは「カイルハウにおける一般ドイツ学園の原理・目的・および内的生命」など1820年から24年までの間に7つの論文を著している。これらの論文の根底にある彼の思想は「ドイツ民族主義」であった。実際にフレーベルは，政治の激しい嵐に巻き込まれながらも1826年『人の教育』という論文を著し，幼児期，少年期，学齢期に分けてその期の発達課題と具体的な教育内容や教授法について自己の教育の信念を述べている。

特に「幼児期」では，内面的なものを外に表現する時期であり，外界の事物と一体の時期でもある。生活においては“遊び”が中心となり，遊びとは「内面的なものの自主的な表現」であり，この時期の最高の生活である，としている。この時期では言語能力が著しく発達してくる時期であり「遊びと話すことは子どもの生活の構成要素」であると記している。そしてやがて自立心や探心も芽生え自主的に選んだ遊びは人間の全体を成長させ死に至るまでの将来の全生活を定めるほどの重要性をもっている，としている。

これらのフレーベルが1826年に『人間の教育』で著した「幼児期」について述べられている内容は，現在でもそのまま通じることは驚きである。経済的な困窮や大自然の中での遊びなど，清貧な生活を送りながらもフレーベルは子どもたちに愛を注ぎ理想を追求していた。

次に特に下線部に注目したい。『幼稚園教育要領』の「第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本」には「幼児期における教育は，生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものであり，幼稚園教育は，学校教育法第22条に規定する目的を達成するため，幼児期の特性を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とする。」と規定されている。この頃，既にフレーベルは「死に至るまでの将来の全生活を定めるほどの重要性をもっている。」と述べている。いつの時代においても，幼稚園教育は幼児期を人間の人格を形成する重要な時期として大切に考えてきたことが分かる。そして，幼児，少年初期を合わせての少年期の生活は未だ一定の方向をもっていない，とも述べている。このことも今，私たちがよく耳にする「幼児期の発達は未分化である」との認識と合致することである。そして幼年期を幼年期らしく過ごすことが，生涯の生活を誤りなく進むことでもであると結んでいる。

#### (5) 幼児教育家フレーベル

フレーベルはすでに『人の教育』において幼児期の教育，遊び・作業についての見解を著しているが，幼児教育への道を志させたのはブルグドルフでの孤児院長の時であるとされている。



この時、かれは幼い孤児の背後にある家庭崩壊の現実をみるとともに、それが何よりも子どもの不幸につながっていると感じ、孤児院内に4～6歳までの幼児の予備学校を設置し、幼児教育への礎となっていった。

1837年の初めにウィルヘルミネ夫人の提案によりカイルハウの近くのブランケンブルグに彼らの活動の居を構えた。フレーベルはこの地に到着するや「自己教授と自己教育とに導く直観教授の施設」を設立した。この施設はまもなく「幼児期と青少年期の作業衝動を育むための施設」(Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit und Jugend)と改称されて遊具や教具の製作やPR、販売を専門的に行うようになった。

この後、彼は『日曜誌』(Sonntagsblatt)を発行し、そこに「創造的な活動衝動を育む施設案」という論文を発表し、いかに幼児期の教育が大切かを述べている。

フレーベルは、幼児のこれらの創造活動は内なる精神の働きによって表現されたものだから、これを妨げずに周囲の者が注意深く見守り、思慮深く保育する必要があると述べているのである。現代にも通じる幼児観であり、フレーベル教育の根底をなすものでもあり、彼は幼児のあらゆる興味と欲求を満足させるのは作業衝動の保育にあると述べている。

また、フレーベルは幼児の健全な活動衝動を育むためには、まず彼らに理想的な遊具や作業教具を与え、人間的な発達を図ろうと試みた。彼は世の中の趨勢が“遊びというものは時間の浪費”とされたり“罪悪視”される中で、子どもたちの心情や生命にふさわしい遊具や作業教具を創造したのである。この時、「さぁ、私たちの子どもらに生きようではないか！」(Kommt, uns uner Kindergarten!)と保護者や保育者に呼びかけたのであった。つまり、子どもへの愛と尊敬に基づいたともに生きる生活共同体づくりを訴えたのである。

## 第2節 教育遊具「恩物」“Gaben”について

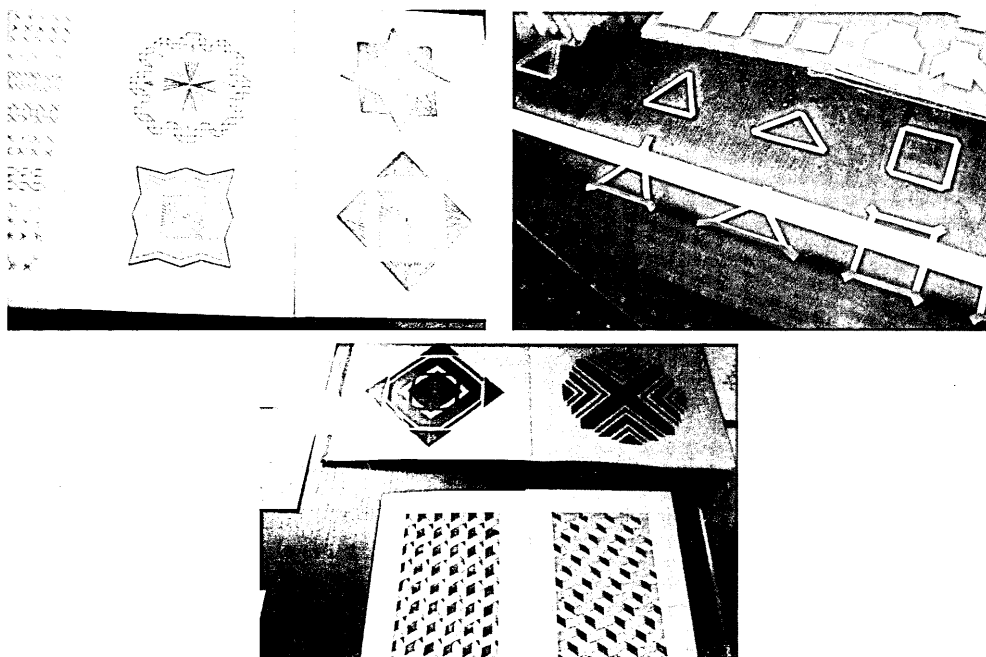
### (1) その目的について

フレーベルは幼児の衝動活動を旺盛にさせるため、何らかの遊具や作業教具が必要であると考えた。それは、・複雑な物ではなく ・単純で基本的な形であって ・創造活動を行うに際しては論理的、数理的な考えを促すことが要求された。全くの創造による材料を通してのみ精神が自己を表現できると考え、遊具の製作に没頭した。こうしてフレーベルは自ら考案し、製作した遊具をGaben<神からの贈り物>と名付けた。後には彼の代名詞になるほど各国に広まっていった。この教育遊具(恩物)の目的とは、第一に「幼児に神の働きを知らせること、神のように創造すること」と宗教観に基づいた教具であることがわかる。第二に「遊びが連続的であること」第三に「この恩物で幼児が遊ぶことで認識能力や心情、意志などいろいろな能力を鍛えることができること」という3つの目的をもっている。なおこの<Gaben>であるが、日本においては1876年(M9)に東京女子師範学校附属幼稚園が創立された時、初代園長であった関信三により「恩物」と名付けられた。関は熱心な仏教徒であったことから仏教的ニュ

アンスの訳語にされたという記録が残っている。

## (2) 神性と恩物

フレーベルが考案したこれらの一連の教育遊具< Gaben > (恩物) は、幼児の心身の発達と要求に応じて、形は単純な物から複雑な物へと連続的に発達するように考えられている。現在では、このフレーベルの教育遊具 (恩物) を使って実践している幼稚園は少ないと思うが、フレーベルはどう願ってこれらの玩具を考案したのであろうか？おそらく第一の目的であったであろう「幼児に神の働きを知らせること、神のように創造すること」とはどのようなことなのであろうか？フレーベルによれば、自然は神の創造作用によってできたものである。従って自然の中には神の神性が宿っている。人間の中には神のように働ける力が秘められている。この人間の本性を神性と言い、この神性を幼児の中に見出していこうとするものである。但し、フレーベルの意味する神性とは完全無欠なものではなく、自己創造的な本質としての神性である、とされている。また、この創造力は人間の最も若い日、つまり幼児期から涵養し育成されなければならないともされている。このことが彼の創り出した遊具の意味である。熱心なキリスト教信者であったフレーベルは、幼児に自然を体得させることにより神を知らせ、神を知らせることにより神のように創造させようとした。また、彼は幼児に自然を体得させる手立てとして象徴を用いて森羅万象の一切の形状や性質や法則を象徴している遊具を創案したのである。つまり球状、立方体、直方体、三角形、棒、ひもなど基本形ばかりである。これらの教具で幼児は



< Fröbel MUSEUM に展示されている教育遊具“恩物”>

作りたいものを何度も創造的に作り出す。また、戻す……、といったように新たな創造力を培うこととなる、とされている。

私は幼稚園教諭の立場から、このフレーベルの教育的遊具（恩物）は今でも幼児の遊びに欠かせない「積み木」の目的とよく似ている、と感じる。幼児が成長するうえで積み木遊びは欠かせない。積み木で遊ぶことで幼児は多くのことを学ぶ。例えば幼稚園での友だちと一緒に遊ぶ積み木遊びを例にとると、ある時は“電車”になったり、ある時は“おうち<家>”になったり“橋”や“道”になったりこれほど無限に広がる遊びの素材はないのではないだろうか？しかも積み木遊びには一人遊びよりも友だちと一緒に遊ぶことの方がより楽しい、遊びが豊かに広がる。次々と遊びを工夫し友だちと力を合わせて遊ぶ、という子ども本来の姿を見出すことができる。フレーベルは神性と人間本来の姿とを鑑みこれらの遊具を創案したが、幼児の本質を捉えていると感じる。だからこそ今でも幼稚園教育においては「積み木遊び」は不可欠の遊びであり、幼児の最も好む遊びの一つである。

### 第3節 キンダーガルテンの誕生

フレーベルは、彼の創り出した遊具の製作活動を通して、保育者の養成の必要性を感じ、チューリンゲン州バードブランケンブルグに1839年6月「幼児教育指導者教習科」を開設した。同時にこれらの受講生のために6歳以下の幼児約40名を集め「遊びと作業の学園」と名付け実習を行った。これが後のキンダーガルテン「子どもたちの庭園」の基礎である。「人生の初めにあって多くの可能性を秘めた幼児は、自然や神と調和しながら経験豊かな保育者に育まなければならない」との信念を強くもった。また、理想の実現のためフレーベルは、夫人や若い女性の役割を重要と考え神聖かつ重大な意義のある幼児教育のために努力するよう一つの大きな婦人連盟を組織しようとした。幼稚園の趣旨をすべての家庭に知らせ、全ドイツの家庭を幼稚園化しようとした。そしてこの連盟の仕事とは、母性を教育するための教育機関であり、家庭の欠陥を補うものでもあった。

こうして1840年6月28日、フレーベルは「一般ドイツキンダーガルテン」と名付け、世界で初めての幼稚園がチューリンゲンに誕生し、キンダーガルテン創立の日となり現在に至っている。この場合の一般の指す意味は普遍的な一般、という意味ではなく“全”という意味だと考えられている。

以上のように、フレーベルの創造した「キンダーガルテン」は、キリスト教の信念に裏付けされ、ドイツという国を背景とした宗教色の濃いものである。その意味では、日本における「幼稚園」の成り立ちとはいささか違いがある。それでは、1840年に日本から遥かかなたのドイツという国で始められた「キンダーガルテン」が、どのようにして我が国に渡来したのかを振り返ってみる。

### 第三章 我が国の幼稚園の始まり

#### 第1節 当時の日本社会

1840年に日本から遙か離れたドイツのバードブランケンブルグの町でフレーベルが始めたキンダーガルテンであるが、日本にはどのように伝えられて現在の幼稚園の発展があるのだろうか。

##### <1840年頃の日本>

1833	天保の大飢饉	歌川広重「東海道五十三次」を著す
1837	大塩平八郎の乱 (大坂町奉行・陽明学者)	大坂町奉行・陽明学者の大塩平八郎が救民のため挙兵した反乱、失敗に終わる
1841	天保の改革	老中水野忠邦・株仲間の禁止令を出す 滝沢馬琴「南総里見八犬伝」を著す
1853	ペリー来航	浦賀に軍艦4隻を率いて入港、開国を迫る
1854	ペリー再度来航	日米和親条約を締結する
1858	神奈川、函館、新潟、兵庫、長崎の4港を開港する	ロシア・オランダ・ドイツとも和親条約を結び鎖国が終結する

上記の表からも窺えるように1840年ごろの日本は、未だ鎖国をしていた時代である。つまりちょん髷を結って刀を差して……という時代であり、幼稚園はおろか、学校教育というものもなかった時代である。ただ、寛政年間（1690年代）頃より徐々に「寺子屋」が増え始め、江戸時代中期以降にはますます増加、江戸時代後期の天保年間（1830年代）には著しく増加したとの記録がある。しかし「寺子屋」といっても庶民には程遠い民間の教育施設であったのだろう。一般の庶民にとって“教育”とは夢のまた夢であったことだろう。

#### 第2節 日本への伝来

19世紀初頭から、アメリカでは宣教師による外国へのキリスト教伝道が盛んに行われ、1858年に鎖国を終結し、神奈川・函館・新潟・兵庫・長崎の5つの港を開港した我が国にも外国の保育施設が紹介され始めた。1875年（明治8）には、近藤真琴が「子育ての巻」を出版し、フレーベルの幼稚園を「童子園」という名称で紹介している。同年、京都市内に「幼稚遊嬉場」、府下に「幼稚院」が設けられた。近藤のこれらの幼稚園の前身となる施設は私立であったが、翌1876年（明治9）には、日本で初めて官立の幼稚園が東京に“東京女子師範学校附属幼稚園”とし開設された。これらの事柄を踏まえ、日本に初めて幼稚園が伝来したのは1876年とされている。現 お茶の水女子大学附属幼稚園蔵の「幼稚保育図」<女流画家・竹水耕齋作>から窺うに、当時の保育は

- ・オルガンを囲んでの歌唱
- ・旗を振っての駆けっこ
- ・習字や裁縫
- ・保育者の周りに集まってお話を聴く 等々、幼児の発達の特徴を捉えた保育がなされていたということは驚きである。また、服装からも極々一部の幼児のための“幼稚園”であったことは明らかである。この頃も開国当時と同様に庶民にとって教育とは“夢”であったのであろう。

しかしこの頃から優れた保育の内容であったことは、日本人の優秀さを物語るものでもあり、我が国がいつの時代にも教育を大切に考えていたことが分かる。

### 第3節 神戸市への伝来と幼児教育者“アニー・L・ハウ”

次に神戸市には「幼稚園」がどのように伝来したのかを考えてみたい。このことを振り返る時、1887年にアメリカから来神した“アニー・L・ハウ”の存在が欠かせない。以下にハウ女史の履歴や功績を記してみる。

- 1852（嘉永5）～1943（昭和18）年。アメリカ、マサチューセッツ州ボストン近郊ブルックラインに、開拓者で熱心なピューリタンの両親のもとに生まれる。幼少期から培われた信仰心と両親から受け継いだ開拓精神が彼女の生涯を支えたとされる
- アメリカで最古の女子大の一つである「ロックフォード女子専門学校」で音楽を専攻後、シカゴの“フレイベル保母養成所”で保母資格を取得後、シカゴ市内の私立幼稚園で保母として勤務しながらフレイベル思想を学ぶ。
- 1889（明治22）年、「頌栄保母伝習所」を開校し、保育界の人材育成に力を注ぐ。日本で初めての保母養成機関は1878（明治11）年の東京女子師範学校の保母練習科であったが応募者が少なく1年で廃止となり1896年に復活した。一方、ハウの興した頌栄保母伝習所は1893年、2年の普通課程に更に2年の高等課程を設置し養成機関を延長……、と彼女の保育者養成にける熱い思いや先見性が見えてくる。1906年、ハウは全国のキリスト教保育界の指導者を結集した日本幼稚園連盟（JKU）を組織し、保育者養成にも力を注いだ。1900年代当初は、公立や仏教系の幼稚園が主流だったが JKU の文書活動などをとおして近代西洋の幼稚園理論を紹介し、日本独自の幼稚園理論を構築する土台を提供した。
- 日本語学習や神戸教会婦人会との付き合いを通じ、日本人の勤勉さや識字率の高さ、洗練された文化などを感じ取り、1927年75歳で帰米するまで神戸で過ごす。1940年、日本は軍国主義に傾きかける時代であったにも関わらず、日本政府はハウ女史に“藍綬褒章”を送った。このことからいかにハウの功績が日本人に高く評価されているかが分かる。



当時多くのアメリカからの宣教師が西洋の思想を紹介し、神戸にもキリスト教が布教されつつあった。ハウは日本人の能力を評価したうえで西洋の教育論を紹介した。それはもちろん「フレイベル」の教育論である。つまりフレイベルの自由を大事とする教育「命令的、規定的、干渉的」であってはならないと強く訴えた。アメリカでは十九世紀半ばからフレイベル思想の実現を目指す運動が生まれておりハウ女史もその一人であったと言える。また、幼児期の遊びの大切さも説き、玩具は子どもと神を媒介するものとしてフレイベル“恩物”を保育に取り入れた。また「幼稚園唱歌」や「クリスマス唱歌」を出版するなど音楽教育にも情熱を燃やした。

ハウ女史の神戸市においての先駆的な幼児教育を実践からも理解できるように明治初頭からは、日本の国内の状況は揺れ動くようなものであっただろう。

このような激しい時代の中においても、幼稚園はどこかで生き続けていた。

1872	福沢諭吉が「学問のススメ」を著す
1875	近藤真琴がフレーベルの幼稚園を「童子園」という名称で紹介している
1876	東京女子師範学校附属幼稚園開設
1878	同 保母練習科を開設
1879	「教育令」制定 学制が廃止され幼稚園は文部省の監督下に置かれる
1880	「教育令」改正 各県に師範学校が置かれる
1881	「小学校唱歌」刊行 文部省取調掛編
1883	渡辺嬉重・茨城県小山村に子守学校を開設 日本最初の乳幼児保育
1886	「小学校令」公布 尋常小学校4年を義務教育とする
1889	「大日本帝国憲法」発布
1890	「教育勅語」発布 戦前の教育の基本となる

1868年明治時代の始まりとともに、この時期は建国の息吹の感じられる時代である。1872年には福沢諭吉が「学問のススメ」を著し学問の大切さを人々に知らしめた。幼児の教育においても「幼稚園」の芽生えがある。

#### 第4節 神戸市の幼稚園教育の始まり

神戸市では1887（明治20）年に私立兵庫幼稚園と私立神戸幼稚園において幼稚園教育が始まった。当時、幼稚園は裕福な家庭の子女が行くところで高価な縮緬の着物をきて通園していたため「ちりめん幼稚園」と呼ばれていた。数年後には、私立頌栄幼稚園・私立御影幼稚園・私立善隣幼稚園が設立されている。設立者が私立であるのは地元の有志の尽力で開園したり、キリスト教会が母体の幼稚園であったりするからだ。神戸市における幼稚園教育で特記すべきは、やはり上記に述べているアメリカ人の宣教師であったアニー・L・ハウ女史が保育界に与えた功績である。彼女は1887年に来日し、キリスト教的使命感とフレーベル主義の教育観でもって「頌栄保母伝習所」や頌栄幼稚園を設立した。同時に、日本初の福祉的幼稚園である善隣幼稚園を創設したタムソン女史とも親交が厚く、JKU（日本幼稚園連盟）を設立し人材育成にも情熱を注いだ。また、神戸市においては居留地の存在からも分かるように、港があったので他のどの都市よりも早く西洋の影響を受けたことが窺える。

### 第III章 時代を反映する幼稚園

1926（大正15）年に「幼稚園令」が公布された。このことは幼稚園が広く社会に認められつ

つあったことを物語るとともに法の整備が急がれることでもあった。1927（昭和02）年には「アメリカ人形歓迎会」が神戸市保育会主催で開催されたり、幼児用観察絵本である「キンダーブック」が創刊されたりと、幼稚園教育の重要性がようやく一般社会に認識され始めた時期でもある。しかし、せっかく幼稚園教育が台頭してきたのに、日本は少しずつ戦争へと進んでいき、その暗い影が幼稚園をも襲っていく。

1945（昭和20）年、太平洋戦争は終結したが神戸市の幼稚園も甚大な被害を受ける。神戸大空襲で灘区の西灘幼稚園は廃園、西郷幼稚園は休園となる。しかし翌1946（昭和20）年には再開される。このようにズタズタになった神戸市であるが、市内でもいち早く再開された幼稚園が5園ある。苦難の中から這い上がっていく先人の努力が如何様であったかが偲ばれる。

### おわりに

「幼稚園の先生」という生活を離れて3年が過ぎる。現役の時には目の前の幼児の無事を願い毎日を過ごすことで精一杯であったが、大学生と一緒に勉強することで、今まで自分では分かっているつもりの方が如何に不確かな知識であるか、また知らないことが多々あることに我ながら驚いた。同じ道を進もうとする若い後輩にこれでは恥ずかしい、いい加減なことを伝えてはいけない、という気持ちを強く持つようになった。“フレーベル”この名前は知っているも他には何も知らない。ところが今夏、ドイツのブランケンブルグに行ってみて彼の幼児に対する情熱や深いキリストへの信仰心、胸を打たれるものである。同時にフレーベルは大変な苦勞をして幼稚園を始めた、ということを知ることができた。これからも現代の幼稚園教育にも通じるフレーベルの教育学を学んでいきたいと願う。

### <参考文献>

- ・FRIEDRICH-FRÖBEL MUSEUM      パンフレット
- ・フレーベル教育学への旅      莊司雅子著（1985年 日本記録映画研究所）
- ・写真によるフレーベルの生涯と活動      莊司雅子著（1982年 玉川大学出版部）
- ・神戸市立幼稚園教育120周年記念誌      神戸市立幼稚園長会（H20年）
- ・神戸新聞「ひと萌える」      （2001年5月23日）